

目 次

□ドイツ主義とスラブ主義との衝突に就て (言語上より見たる歐洲動亂の一面觀)	保科孝一
□日本建築の研究	文科二部三年 田中、小曾戸、平井、江見
□精神的教育	文科一部二年 渡邊カツ
□都市形式の研究	文科二部四年 A. B.
□シヨツベン、ハウエルの女子に關する論文ミラスキ ンのセサム、アノド、リリス中の「リリス、オ ブ、クワインス、ガードニス」を讀みて、それより 提供せられし若干の問題をばもう	千葉安良
□日本美術の研究に就いて	澤村專太郎
□文苑	
□歌(尾上八郎)	
□歌(中山八千代) (中村嘉津) (安吉ます) (梶原千代子)	みなみ
□川そひの村	みなみ
■雜報 □會計報告 □會員動靜等	
■研究 □讀方教授の效果測定法 □日光旅行地理的研究	(文科二部三年)

ドイツ主義とスラブ主義との衝突に就いて (講演)

(言語上より見たる歐洲動亂の一面觀)

保科孝一

今日は、ドイツ主義とスラブ主義との衝突に就いて(言語の方面より見たる歐洲動亂の一面觀)と云ふ題で御話する積である、實はこの題目も垣内君に作つて頂いたものであるが、私にはこんな立派な題目で御話することはなかなか容易なことでない、その上調査も不充分で、時々は脱線するかも知れぬ、しかし現在歐洲は大脱線をして居るから、私も少々脱線しても差支はあるまいと思ふ。

歐洲に於ける、スラブ主義とドイツ主義との衝突は、近頃はじまつたことでないが、しかし兩三年來は殊にこの兩主義の衝突が烈しくつて、遂に、今日の大動亂を醸すに至つたのである。

さて、千九百十一年の九月下旬、伊太利が突然トリポリ問題を提起して、十月一日には既に宣戰を布告した。初め伊太利の考では、容易くトリポリを奪ひ得るものと思つて居たが、實際戰爭をして見れば、なかなか思ふ様に行かずトリポリの後方に居る、アラビヤ人の勇敢な行動の爲めに、伊太利人は非常に苦しめられた。如何に堅甲利兵を以てしても、徒手空拳に等しいアラビヤ人と土耳其兵を一擧にして討伐することが出来な

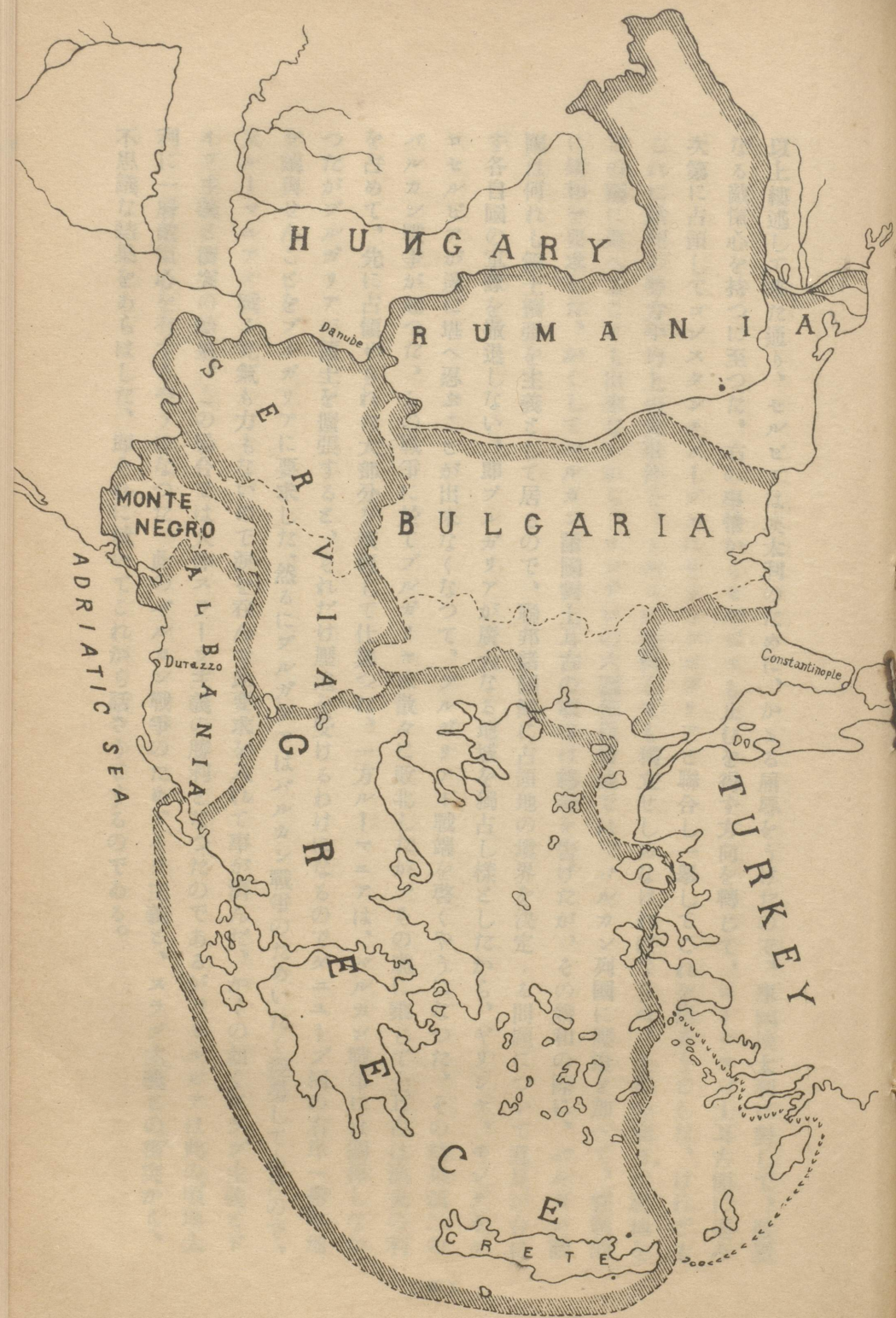
いのみならず、却つて散々惱されて、十月から半年を経過しても容易に目的を達することが出来なかつた。

一方土耳其の方でも、伊太利に海上權を奪はれたので、トリポリとの連絡を失ひ、増援を送ることが出来ずその内に本國では、内憂外患交々起つて來た。即ち伊土戰爭の虚に乗じて、アルバニヤ人が亂を起したのである。アルバニヤ人は土耳其人種と異り、一の雜種であつてラテン人種に近いのであるが土耳其領となつてから、絶えず虐待せらるゝため、機を見ては獨立せんとし、度々謀叛を企て、その度毎に少しづつ權利を得たのである。其の主なるものは、これまでアラビヤ文字を強制的に使用せしめられて居たが、その束縛を解いて、ギリシヤ文字か、ラテン文字を自由に使用することの許可を請うた。土耳其政府も背に腹はかへられず、兎も角も許可すると云ふ條件で、内亂は一時治まつた。けれども、土耳其政府はこの約束を實行しなかつた。その内アルバニヤ人は又謀叛を起して、自國語の學校設立を土耳其政府に逼り、又例の如く、許可されなければやはりこれも實行せられなかつた。故にアルバニヤは土耳其政府に對して不滿を抱いて居た。しかるに土耳其は、伊太利と戰端を開き、國內疲弊、政府の威信地に墜ちたのを見て年來の怨恨を報い様として又反亂を起したのである。しかし、土耳其政府は、それを征服することが出来ないので、その處置に苦しみ、先づ機會を見て、伊太利と媾和せんことを希望して居た。又伊太利の方でも、前述した様に、戰爭は思はしく行かないので、遂に互に讓歩して、千九百十二年春、媾和を結び、トリポリを土耳其より伊太利に讓與し、伊太利は若干の金額を土耳其に代償する様に、解決がついて、この戰爭は終末を告げたのである。換言すれば、土耳其が伊太利にトリポリを賣却したと同然な結果となつたのである。この時、土耳其政府内に於ける、政權の爭奪が、頗る激烈となつて、外を顧る餘裕がないので、アルバニヤの反亂に對して、政府も大に困難を感じたのである。斯くの如く土耳其は、國內の統一を失ひ、政府の威信昔日の如くでないのを

見てバルカン列國は期乘すべしとなし、マセドニヤ問題を提げて、土耳其政府に難題を持ちかけた。元來、バルカン列國は、常に各々領土擴張を希望して居たけれども、權力平均の關係上、バルカン半島に於ては、寸尺の領地を廣むることも出来なかつた。たゞヨーロッパ土耳其を或る機會を見て、之を奪取し様として互に苦慮して居たのである。

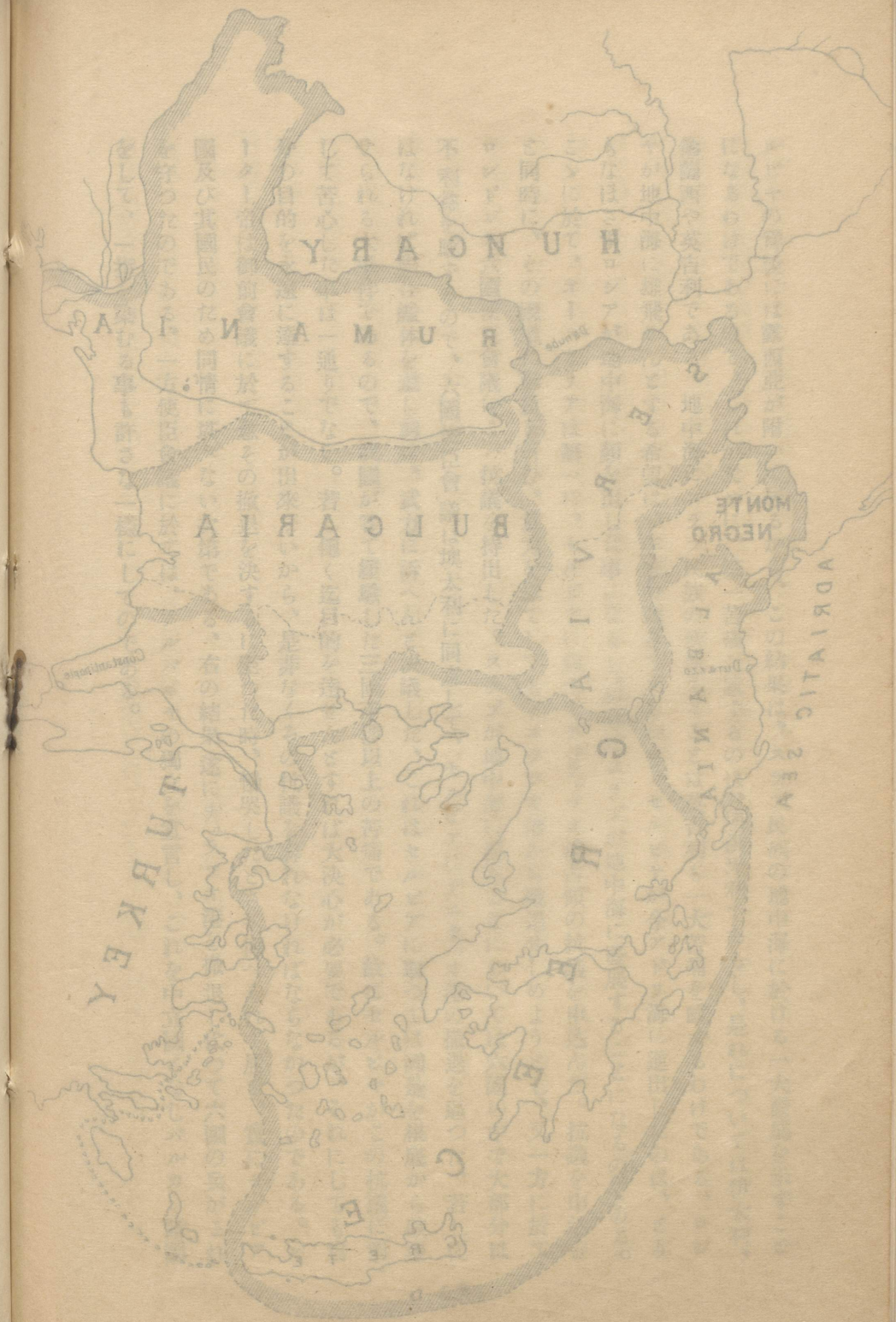
右の如く、土耳其の疲弊に乗じて、マセドニヤ問題を提げて、土耳其政府に逼り、之を口實としてバルカン列國が土耳其に對して戰端を開いたのである。歐洲諸國にては、バルカン列國が聯合蹶起しても、恐らくまだ土耳其の敵ではあるまいと豫想して、戰爭の結果を賭したものが多かつたが、先づ土耳其に七分、列國に三分と云ふ状態であつたと云ふことである。何故かと云ふと、土耳其の背後にはドイツが附いて居てそのドイツの元帥フオンデル、ゴルツさへ土耳其の勝利をうけあつたほどであつた。

しかるに、土耳其は案外弱く、連戰連敗、領土日々に縮ると云ふ有様で、これには歐洲列強も意外であつたのである。さてセルビヤは、四面山にて圍まれて丸で日常生活上の物資は外國の領地を経過しなければならぬ有様であるがこれでは當に、國運發展に不利なるのみならず、日用の不便も少くないので、如何にもしてアドリヤチックに顔を出さうとつとめて居た。それであるからこの時、好機逸すべからずと考へ、殆ど一國の運命を賭して、勇敢に戦ひ、遂にアドリヤチック海のデュクツツオ港を占領した。これはセルビヤにとつては百年の大計を成就したわけになるので、その喜は一通りでなく、國民は殆ど狂喜して勝利を祝つたのであつたが、さてセルビヤが、新にこの港灣を獲たことは、歐洲の權力平均上一大問題となるのである。即ちセ



ルビヤの背後には露西亞が附いて居るから、この結果は、スラブ民族の地中海に於ける一大發展を示すことになるわけであるので、これがために、第一苦痛を感じるのは、奥洪牙利であるし、是れについては伊太利、佛蘭西や英吉利である。地中海にスラブ民族の發展することは英吉利も一大苦痛を感じるわけである、ロシヤが地中海に雄飛せんとする希望は、年來の國是であるから、セルビヤが今アドリ海に進出したのは、とりもなほさずロシアが地中海に顔を出した事になるし、同時にスラブが地中海に發展することになるのである。こゝに於て、オーストリアは第一に、セルビアに向つてデユラツオ港占領の抗議を申込んだ。抗議を申込むと同時に、その國境に動員を行ひ、武力を以てしてもデユラツオ港から撤退せしめようとし、又一方に於てロンドンの六國使臣會議にこの抗議を持出した。スラブが地中海に出ることについては六國の中で大部分は不利益を感じるので、六國使臣會議は奥太利に同意して、セルビアにデユラツオ港の撤退を逼つた、若し従はなければ聯合艦隊を差し向け、武力に訴へんと決議した、これはセルビアに取つては國是を根底から破壊せられる大事件であるので、我國が嘗て經驗した三國干渉以上の苦痛である。故にセルビヤがこの抗議に對して苦心した事は一通りでない。若し飽く迄目的を達せんとすれば大決心が必要であるが、それにしても自分の目的を永遠に達することが出来ないから、是非なくその抗議を容れなければならなかつたのである。ピーター帝は御前會議に於て愈その撤退を決するに至つた時、慟哭したとさへ傳へられて居る、實にセルビア國及び其國民のため同情に堪へない次第である、右の結果遂にデユラツオ港を撤退し代つて六國の兵がこれを守つたのである、一方使臣會議に於ては、アルバニヤの獨立を宣言し、これを中立國となしバルカン諸國をして、一指を染むる事も許さな一様にしてのである。

以上縷述して来た通り、セルビアは奥太利のために、かゝる屈辱をうけたので、舉國奥太利に對して、激烈なる敵愾心を持つに至つた、右の事情からセルビヤも止むを得ず方向を轉じて、ヨーロッパ土古領に進み次第に占領してコンスタンチノープルにせまりブルガリアと聯合し一舉してこれを陥さうとした、けれどもこれに歐洲の勢力平均上の大事件で、トルコは如何しても獨立せしめなければならぬ、土都の如き形勝地をどの國に與へることも出来ないから、ロンドンの六國使臣會議では、バルカン列國に壓迫を加へて、強制的に媾和を要求した、かくしてバルカン諸國對土耳其の戦争は終局を告げたが、その媾和の際に、バルカン諸國は何れも領土擴張を主義として居るので、聯邦諸國間に占領地の境界を決定する問題について意見が合はず各自國の軍隊を撤退しない、即ブルガリアが廣大なる地域を獨占し様としたから、ギリシヤ、モンテネグロセルビアが遂に堪へ忍ぶことが出来なくなつて、ブルガリアと戦端を啓くやうになつた、その結果第二のバルカン戦争が起つた、この戦争に於てブルガリヤは散々に敗北したが、その虚に乗じて土耳其は漁夫の利を占めて、先に占領せられた大部分を恢復して仕舞つた、一方ルーマニアは、バルカン戦争には關係しなかつたがブルガリアが領土を擴張すると、それだけ壓迫を受けるわけになるのでダニユーブ河の右岸一帯の地を讓與せんことをブルガリアに要求した、然るにブルガリアはバルカン戦争のためいたく疲勞してゐたので、又ルーマニアと戦ふ元氣も力もないので涙を呑んで此要求を入れて事が濟んだ、かくの如くスラブ主義とドイツ主義と衝突の結果、この場合では大体スラウ主義の勝利となつたのであるが、セルビアは此の頃奥太利に一層敵愾心を有するやうになつた、此のバルカン戦争のためドイツ主義と、スラブ主義との衝突から、不思議な結果をあらはした、即それに就いてこれから話さうとするのである。



さて奥洪國はハンガリーと、オーストリアとの二獨立國が合して一となつて居るのであるが、これはつまり兩者は利害を全くして居る關係上一時共同生活をして居るに過ぎぬ妙な國柄である、(但し聯邦ではない)兩國とも獨立する力は勿論ない、然るに奥洪國では、人種言語の關係から、スラブ主義、ドイツ主義、マヂャール主義の三主義が、常に相衝突して居る、この三主義のものが、それぞれ一地方に割據して居ればまだ統御し易いのであるけれども、各地に混在して居るのでなかなか統一することが六かしいのである。

奥國は大躰ドイツ語を使用して居るけれども、國境に近いボヘミアでは、ドイツ語とボヘミア語とを使用して居る。このボヘミア人と云ふのはスラブ族である。イタリアに接したチロール地方ではイタリア語が行はれ、又奥領のポーランドではスラブ語系に屬するポーランド語を使用する。斯の如く一國內に種々の國語が行はれ、その主なものを擧げて見れば、マヂャール語、即ち洪牙利語、イタリア語、ドイツ語、ポーランド語、チェック語、即ちボヘミア語、ルターネン語、セルビヤ語、スローバツク語、クロアチア語、スローウェン語等である。

ハンガリーも大体はマヂャール語を使用して居るけれども、なほ、地方によつては、ラテン語系に屬するルメニヤ語、或は、イタリア語が行はれてゐるし、又、スラブ語系に屬するクロアチア語、スローウェン語、ルターネン語、セルビヤ語等が行はれて居る。——言語の系統上、チェック語、スローバツク語、ポーランド語、ルターネン語、セルビヤ語、クロアチア語はすべてスラブ語である——議會に於ても、議員は其選出せられた地方の言語を使用するので、お互に意志を疏通させる事が甚だ困難である、又、この國の議會の習慣として、一度發言權を得たならば、他の人がたやすく其の權利を奪ふ事が出来ないので、政府に對する反

對演説の時などになると、十三時間、或は、十六時間も一人で演説する様な事もあつた。他の議員は何もわからない事を長時間聞いて居らねばならぬのである。故になかなか、まごまごがつかなくて、一つの議案に五十何時間、或は、八十何時間を要する事もある。

教育上にも兩主義の競争がある。即ち、教育によつて、其の民族の言語を擴張することは、民族的勢力の發展上非常に有力な手段であるから、それに關係して政治上重大な問題が起る。例へば、小學校を設けるとして、若し全兒童數二百人の中、百二十人がチェック語を用ゐ、八十人がドイツ語を用ゐて居るとしたら、其のどちらの言語を學校語として用ゐるか、多數に従へば勿論チェック語を用ゐることになるが、さうすると、ドイツ人がこれに反對する。さればといつて、二校を分設することが經濟上出来ない。そこで種々の困難な問題が生じて來るのである。ハンガリーに於てもこれと同様で、その國境地方では、常にスラブ主義と、マヂャール主義との争ひがある。ハンガリーは、管内のスラブ人を同化しようとして其の人名や地名等を凡てマヂャール語に改めさせようとした事がある。これにはスラブ人の默從する事が出来ないから、死力を盡して反抗するのである。

軍隊に於てもさうで、フランツヨーゼフ陛下即位の當時は奥洪國の軍隊では凡てドイツ語を以て命令語、教育語と定められてあつたが、奥洪二國が共同生活をして居る爲按分比例で國費を負擔して居るが、漸々その費用が増加するので、その負擔を、富裕なハンガリーの方に多く背負はせ様とした。すると、ハンガリーではその負擔は敢て辭さないが、無條件ではいやだ、それを多く負擔する代りに、ハンガリーの軍隊には、教育語として、自國語、即ち、マヂャール語の使用を許可せられたいと申し出た。最初皇帝は、軍隊の統一上、

甚だ困難を感ずることになるから、之を拒絶されたけれども、國費多端の爲遂に、止むを得ず之を許容されたのである。——現在ハンガリーからは、塊洪國共同國費の三割六分四厘を負擔してゐる——けれども、軍隊の統一上、命令語のみは猶ドイツ語を使用して居るわけであるが、しかし、ハンガリーは、この命令語をも自國語にしたいと常に要求して居る。海軍は何うかといふと、水兵はアドリヤ海岸地方から募集するので彼等はイタリア語か、スラブ語を用ゐる人ばかりである。

以上述べて來た様な有様であるから、若し塊洪國と、ロシアと、或は、イタリアとの間に事端が生じたとしても全國民が皆一致して祖國の爲に、敵國と勇敢に戦ふや否やは疑問である。斯の如く兩主義が塊洪國に於て如何に軋轢して居るかは、バルカン戦争によつて證明せられて居る。塊洪國がセルビヤロヂスラツオ港の撤退を申込んだ時、セルビヤと同種類に屬する塊洪國內のスラブ人は如何なる態度をとつたか。即ち、南部スラブ人は、大いにセルビヤに同情して、スラブ民族發展の示威運動を行ひ、又、北方ガリシヤに於けるポーランド人は、一朝、ロシアと、オーストリアとの間に戦争の起つた場合には、中立を守るといふことを宣言して居る。又、ボヘミヤ人、即ち、スラブ民族に屬するチエック人は、本國の危急に赴くブリガリヤ人が、ボヘミヤを通過する際、種々の物品を贈り、或は、彼等を大いに激勵し、同情し、共にスラブの國民歌を歌つて、『腐れかゝつた塊洪國を倒せ』と叫んでゐる。此の如きは畢竟國民的感情と、スラブ主義の爲に生じた現象であつて、之れが國家といふ觀念よりも一層強いものであるといふ事を十分に證據立てゝゐる。斯の如く歐洲では常にスラブ主義と、ドイツ主義とが相衝突して居つて、其の最も激烈な、且つ悲惨な例は塊洪國に於て見る事が出来るが、なほ、それと同様な例は、ドイツ領ポーランドにも存在する。

ドイツは、ポーランドを凡てドイツ主義の下に同化しようと苦心して居るが、ポーランドは、あくまで之に反抗して其の國民性を保持しようと努め、ポーランドの兒童は、學校に於てすべてドイツ語によつて教育せられて居るが、しかし、家庭ではポーランド語を用ゐ、絶対にドイツ語の使用を禁止されて居る。社會に出ても實際止むを得ぬ時だけドイツ語を用ゐるが、否らざる場合に之を用ゐると同胞から絶交される。殊に此の敵愾心の強いのはポーランドの婦人で、ドイツ政府の凡ての政策に反對して居る。

斯の如く、歐洲では人種、言語、及び宗教を同じうする者が各々一團となつて、互にその民族的勢力及び主義を擴張しようとしてゐるが、それが、近頃ますます激烈に赴き、至るところに衝突し軋轢して、甚だしきは流血の慘を見ることも少くない。故に、何時か大破裂があつて、何れかが亡びる様にならなければ、永遠の平和を見る事が出来ない状態になつて來たので、これは歐洲一般に認められて居つた事實である。セルビヤ人がオーストリーの皇儲を弑したのが最近の動機となつて、今日の戦亂を惹起したといふことになつてゐるけれども、それは、唯事端を啓いた近因で、その一大原因は、遠く過去數百年來兩主義の衝突にあるのは言ふ迄もない。若し兩主義のバランスが破壊して、いづれか他に抑壓されるやうになれば、現歐在洲に於ける文明國は其の面目を一新する事となるであらう。我々は一大興味を以て、此の戦争の結末が如何に收まるかを見て居るのである。

長い間清聴を煩はした事を深く感謝する。(筆記)